

く石川真澄の目／＼浮かばれぬ死霊の群れをモスクワは想像できるか

アサヒグラフ 91.9.13号

一冊の本を著者から贈っていただいた。『はるかなる青春』。Kさんの詩歌集(非売品)である。

Kさんはある県の幹部を十六年つとめ、副知事を最後にこの夏六十二歳で退職した。あたたかい誠実な人柄で多くの人に敬愛されているが、政治よりは学究の人と思わせる勉強家でもある。

本は、退職記念に親しい人々に配ったいわば私信のようなもので、だから私も実名を書くのをはばかっているのだが、それでもあえてここで紹介したいと思ったのは、私情からばかりではない。

献辞に「一九九一・八・二五 ソ連共産党解散の報を聞きつつ」とある。そこには、たまたまの上梓の時を記す以上の著者の思いがある。

駅頭にアカハタ売れば初客は赤子背負いし朝鮮人なりき

ひたすらに線路の道を歩みたり路銀乏しきオルグのわれら

Kさんはいわゆる革新陣営の人である。県庁に入ったのも、革新知事の補佐役としてだった。「あとがき」でKさんはいう。

「マルクスは階級社会がなくなり、国家がなくなる世を予見し、これを『人類の青春』と呼んだ。私はかつてそれを信じ、そのために自分の青春を捧げた」

Kさんは一九五八年に日本共産党を離れているが、この本に収められた詩歌の中心はそれ以前のものだ。その時期のうたを今、この時出す。「あとがき」は続けていう。「それは壮大な徒労に終わった感もするが、しかしそのことを私は少しも悔いていない。いや、むしろ戦後のあの時期に、貧しさとの闘いや人間開放のための運動に心動かされることのなかった人びとを、私は余り信じる気になれない」

しかし、一方で「モスクワに告ぐ」という五七年につくった次のような詩がある。

おれは敬礼する

モスクワの赤い星よ

拒否してきた

数々の慰めの季節の彼方に

お前はいつも傲然と輝いていた

(中略)

だがモスクワよ

お前は知っているか

お前のひと呼吸のタイミングが

少しずれただけでも

お前の一挙手の方角が
少しゆがんだだけでも

全世界の左翼が大量に生き

そして 大量に傷つき死ぬことを

モスクワの赤い星よ

お前の赤は

人の心を凍らせる赤であってはならぬ

お前の赤は

見る人の心を温め励ます

太陽の赤でなければならぬ

幾十幾百万もの青春が、これと同じ黒雲のような疑いと一縷の希望とを抱いて滅んでいった。Kさんの詩歌集には昂然たるセンチメンタリズムがあつて救われるが、ついに浮かばれない死霊の群れをモスクワは想像することができるだろうか。(朝日新聞編集委員)